

「14 世紀エジプトにおけるムスリム・コプト関係の展開：

コプト聖人の活躍を中心に」

研究代表者：辻明日香（東京大学東洋文化研究所助教）

1. はじめに

(1) 研究の背景

現代の西アジアは、宗教的マイノリティーの文化や信仰、言語などに関する、深刻な人権問題を抱えている。エジプトを例に挙げても、1990 年代から各地でコプトの教会が襲撃・破壊されている。2012 年 1 月に起きた革命以降も、ムスリムとコプトの衝突は頻発している。これらの問題は、歴史的背景の考察抜きに、正確に理解することはできない。西アジアにおける多数派であるムスリム（イスラーム教徒）と、少数派に属するキリスト教徒やユダヤ教徒（ズィンミー）が、歴史的にどのような関係を築いてきたかという問題を解明することで、この難問への理解と対処に貢献したい。

イスラーム政権下の社会においては、キリスト教徒やユダヤ教徒は啓典の民としてズィンマ、すなわち庇護を与えられていた。その一方で、ユダヤ教徒に強制された黄色の丸印章も、イスラーム政権下で生まれたものである。上記のような状況から、西アジアにおけるキリスト教徒、ユダヤ教徒に関する研究は、イスラームが他の宗教に対して寛容であったか、あるいは非寛容であったか、という本質論に重点が置かれてきたように思われる。しかし、ムスリムとズィンミーとの関係は、決して固定的なものではなかった。両者の関係は、時代・地域の文脈の中に位置づけて初めて、説得的かつ有効に理解しうるものである。

さて、西アジアでイスラーム化が完成しつつあった 10 世紀においても、エジプトの人口の大部分は依然として土着のキリスト教徒であるコプトであった。ところが 13 世紀後半、マムルーク朝のスナ派政策やスーフイーの活動の拡大に伴い、エジプトの「イスラーム化」が進展した。そして 14 世紀、コプトは大規模な教会破壊を経験し、その大半はイスラームに改宗したと言われている。この時代、ムスリムとコプトの関係はどのように変容し、14 世紀はコプトにとってどのような時代であったのであろうか。

(2) 研究の目的

コプトの視点から、この時代にキリスト教徒として生きるとはどのような体験であっ

たのかということを検討する。その際、注目したいのが 14 世紀に聖人として崇敬された、コプトの隠者や修道士である。14 世紀、信仰の場を奪われたコプトの多くは改宗した。その際、残されたコプトの精神的支えとなったのが、一般信徒の助言者として活躍し、様々な奇蹟を起こしたこれら「聖人」であった（文献 4）。

彼らの生涯や奇蹟を紹介する小冊子はエジプト各地の教会や修道院で販売されているものの、『バルスーマー伝』を除いては（文献 1）、彼らの聖人伝自体は近年まで学術的研究の対象とならなかった。ビザンツ史やヨーロッパ中世史では、1960 年代後半から、聖人伝を歴史研究の中で使用する方法が模索され始めた。本研究が扱う、14 世紀すなわち聖人の死後間も無い時期にアラビア語で著されたコプト聖人伝にも、マムルーク朝下のコプト教会のみならず、エジプト社会全体に関する貴重な情報が含まれている。『キリスト教アラビア語文学史 *Geschichte der christlichen arabischen Literatur*』を著したグラフ G. Graf は（文献 2）、これらを叙述テキストの聖人伝史料群のうち、隠者系統として分類したが、史料群として本格的に研究されたことはない。

そのため、これら聖人について研究するためには、まずは聖人伝の史料群としての性格を把握する必要があるといえる。これが、本研究の中心となる。本研究では、『バルスーマー伝』を中心に、新たな手稿本の発見や、今まで知られていなかった聖人伝の発掘に努める。その上でこれら聖人伝について、各聖人伝の基礎的特徴や編纂の背景を分析し、史料群としての性格を考察する。

14 世紀という、コプトにとり困難であった時代において、なぜこのような作品が著され、それにはどのような意図があったのか。上述の課題を踏まえた上で、聖人伝の叙述から、当時コプトが置かれていた状況や、ムスリムとの関係について考えたい。

2. 研究の手法と実施内容

（1）史料の所蔵状況

アラビア語のコプト教会史料は近年まで過小評価され研究対象となりにくかったことから、その所蔵状況については不明な部分が多い。1940 年代にグラフが編纂した文献目録、『キリスト教アラビア語文学史』も完全とはいえない。その理由としては、（1）エジプトでは手稿本の所蔵状況について公開していない教会や修道院が多い、（2）16 世紀以降、宣教師や旅行家がヨーロッパに持ち出したことから、コプト教会史料はヨーロッパ各地に散在しているものの、アラビア語のコプト手稿本に関するカタログ情報は

不十分である、ということが挙げられる。そのため研究を効果的に進めるためには、ヨーロッパとエジプト双方における手稿本の網羅的な現地調査が重要となる。本研究はヨーロッパから手稿本のマイクロフィルムを取り寄せつつ、現地調査を積極的に行った。

(2) 調査

(i) 2010年1-2月、エジプト

上エジプトのアスワンで開催された、聖マルコ財団が主催するコプト歴史学シンポジウムに参加した後、カイロのズワイラ街区（アズハル地区付近）にある聖処女女子修道院にて手稿本を閲覧した。この修道院は14-15世紀にかけてコプト正教会の総主教座が置かれていた場所にあり、14-16世紀の聖人や殉教者の聖遺物が安置されていることで有名である。

この修道院には以前から調査で出入りしていたが、図書館のカタログに問題があり、そのコレクションの全容を把握できないでいた。今回は知り合いの研究者から、当修道院が13世紀に生きた聖人、ハディードの聖人伝を所蔵しているという情報に基づいた訪問であった。だが、カタログ番号から手稿本にあたったところ、それは『ハディード伝』ではなく、その弟子のユハンナー・アッラッバーンの聖人伝であった。カタログ番号に近い他の手稿本も閲覧したが、『ハディード伝』は見つからなかった。このときはこの『ユハンナー・アッラッバーン伝』の手稿本の価値がわからずにいたが、撮影許可を得て、手稿本をカメラに収めた。

2010年9月、他の研究費によりカイロとアレクサンドリアの間に位置する、ワーデュー・ナトルーンのスルヤーン修道院にて『ハディード伝』と『ユハンナー・アッラッバーン伝』両手稿本を閲覧した。その結果、聖処女女子修道院で閲覧した『ユハンナー・アッラッバーン伝』の手稿本は、現存する最古の手稿本である可能性が判明した。管見の限り、今までこの手稿本の存在は全く報告されていないため、偶然ながら非常に貴重な発見となったのである。

(ii) 2011年6月、フランス

2011年6月には、約一週間、パリのフランス国立図書館にて『バルスーマー伝』と『アラム伝』の手稿本（実物）を閲覧、筆写した（ms arabe 72, 153 文献5）。両手稿本とも既にマイクロフィルムを取り寄せていたが、状態が悪く、とりわけ『アラム伝』は

マイクロフィルムの大部分が真っ黒で文字の痕跡さえ見えないという状態であった。そこでフランス国立図書館の東洋写本部門に手紙を送ったところ、手稿本の実物を閲覧する許可が得られたため、現地に出かけた。

閲覧した結果、『バルスーマー伝』手稿本は別の機会に調査した、フィレンツェ国立中央図書館所蔵手稿本とほぼ同一であることが明らかになったが、『アラム伝』の手稿本には苦戦を強いられた。この手稿本は書写してからインクが乾かないうちに綴じられたようであり、片面のインクが反対側にうつっていた。そうでない場合も、反対の面に紙自体がくっつき、後世にそれを無理矢理剥がしたため、片面には紙が上からかぶり、もう片面からは文字が書かれた紙が剥がされ、両面とも真っ白という惨状のフォリオが多かった。

一週間、太陽光に紙面をすかしながら手稿本と格闘した結果、なんとか文字を追うことができるようになった。他の聖人伝の語彙から書かれた単語を類推し、手稿本の大部分を再構築できたと考えている。

『アラム伝』はエジプトの聖アントニウス修道院も所蔵しているが、この修道院も図書館の利用が非常に難しい。そのため、この聖人伝は存在が知られながらも、その内容について詳しく紹介されたことがない。本調査はこの聖人について光を当てる、とても重要なものとなった。

3. 研究の成果

(1) 新たな聖人の発見

本研究においては、聖人バルスーマー（1317年）と親交のあった聖人について、新しい情報を得ることができた。まずカイロで閲覧した聖人伝の主人公、ユハンナー・アッラッバーン（1307年）については小冊子でその生涯が紹介されているほかは（文献3）、ほぼその存在を知られていなかった。本研究にてはじめて、手稿本の所蔵状況や構成について紹介することとなる。没年については小冊子と手稿本との間に矛盾があったが、下記のようにその情報を訂正し、この聖人は13世紀から14世紀前半にかけて下エジプトに生きた人物であることが明らかになった。これは、『バルスーマー伝』にユハンナー・アッラッバーンの死が記されていることから裏付けられる。

また、『アラム伝』の主人公アラム（1343年）も、バルスーマーの弟子であり、ユハンナー同様下エジプトの出身であることがわかった。さらに、これら3名ともカイロ郊

外のトゥラーにある、シャフラーン修道院と縁のある人物であることも指摘できる。

12 世紀世紀末以降の、下エジプトにおけるコプト教会の活動は謎に包まれていた。今回その存在や活動が明らかになった聖人は兩名とも下エジプト出身であり、その伝記には下エジプトのキリスト教集落や教会に関する記述が多く、マムルーク朝期の下エジプトに関する全く新しい情報が提供されることとなった。

本研究を始める前は、この時代のコプト聖人は 14 世紀の後半に集中しており、前半にはバルスーマーしか活動していないと考えていた。だが、実際にはバルスーマーを含めシャフラーン修道院系統の聖人が 3 名おり、今後の調査次第ではそれ以上に発見される可能性もある。

14 世紀後半の聖人伝には、迫害や改宗をテーマとしたものが多いが、『バルスーマー伝』はカイロにおけるムスリムとコプトの日常的交流や、ムスリムによるバルスーマー、すなわちキリスト教の聖人への崇敬について伝えている。14 世紀後半の聖人伝と比べた場合、『バルスーマー伝』に描かれた社会の特殊性が目立つが、『ユハンナー・アッラッバーン伝』も、同じく下エジプトにおけるムスリムとコプトの交流や、ムスリムによるコプト聖人崇敬の実態を描いている。『アラム伝』に記載された奇跡譚自体は牧歌的ながら、ムスリムへの言及は少なく、逆に教会の破壊についてしばしば言及する。ゆえに、ここにおいて、14 世紀初頭のバルスーマーの時代から 14 世紀半ばのアラムの時代にかけて、ムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒が日常的に交流する社会から、14 世紀後半のコプトが改宗を強制される社会へとつながる、大きな転換を見いだすことができるのである。

(2) 各聖人伝の特徴

以下においては本研究で取り上げた各聖人伝について、基礎的な情報—その生涯、手稿本の所蔵情報、手稿本の構成—をまとめた。手稿本の所蔵情報には未見のものも含まれているが、グラフやワディウ・アブルリーフによるバルスーマー、アラムの文献目録（文献 2, 6）を更新するために、すべて記載することとする。

i) ユハンナー・アッラッバーン伝

生涯：この聖人伝に関する情報はスルヤーン修道院が発行した小冊子で初めて紹介されたと思われる。ユハンナーはカイロに生まれ、幼少時から修道生活に憧れた。カイロ

郊外のシャフラーン修道院で修行した後、下エジプトにあるヌトゥービスの教会司祭、ハディードの弟子となる。ハディードの死後、下エジプトの町や村を放浪し、サマンヌードにて病死する。

上述の小冊子はユハンナーの死亡年をコプト暦 1124/西暦 1407 年（以下コプト暦/西暦を略）と記しているが、下記のスルヤーン修道院所蔵両手稿本と聖処女女子修道院所蔵手稿本には 1024/1307 年とある。ハディードの死亡年が 1103/1387 年と手稿本にあることから、小冊子の著者が『ユハンナー・アッラッバーン伝』の記述を訂正したと考えられる。しかし『ユハンナー・アッラッバーン伝』は第 80 代総主教ユアンニス・イブン・アルカディース（在位 1300-1320 年）の下エジプト巡幸とスルタン・アシュラフ期の迫害に言及しており、スルタン・アシュラフ・ハリールの治世（在位 1290-1293 年）中、1293 年にズィンミー官僚追放令が公布されていることから、死亡年を 1024/1307 年とし、ハディードの死亡年を訂正する方が妥当であろう。

手稿本：Wādī an-Naṭrūn, Dayr as-Suryān, ms mayāmir 306 (18 世紀), fols. 46b-116b; 同, ms mayāmir 311 (1267/1551), fols. 70a-126b; Cairo, Hārat az-Zuwayla, Dayr as-Sayyidat al-'Adhrā', ms mayāmir 8 (1160/1443-44), fols. 1-103; Dayr Anbā Anṭūnī, ms tāriḫ 155 (n. d.) (未見).

スルヤーン修道院所蔵 ms mayāmir 306 の「伝記」にはスルヤーン修道院所蔵 ms mayāmir 311 や聖処女修道院所蔵手稿本の記述と異なる箇所が多いが、そもそも後者 2 点と比べ完成年代が新しい上に、「伝記」部分の紙が他の部分と比べ新しいこともあり、史料としては後者 2 点に依拠すべきであろう。

構成：長い礼讃文、「伝記」と「奇蹟録（全 29-30 話）」からなる。

ii) バルスーマー伝

生涯：シャジャール・アッドウッルに仕えた官僚の家に生まれるものの、修道士となり、腰布一枚で修業の日々を送った。1301 年に公布された教会封鎖令に抗議してフスタートにある教会の梁の上で生活し、逮捕時に奇蹟を起こしたことで有名である。シャフラーン修道院へ移った後数々の奇蹟を起こし、ムスリム・コプトを問わず、スルタンやアミールから貧しい寡婦まで、彼のもとを訪れる崇敬者が絶えなかった。

手稿本：Paris, Bibliothèque nationale, ms arabe 72 (1358), fols. 31a-83b; 同, ms arabe 282 (1650), fols. 1a-82b; 同, ms arabe 4885 (19 世紀), fols. 95a-161b; Firenze, Biblioteca

nazionale, M. Cod III, no. 30 (ms arabo 37) (1638), fols. 145a-221b; Oxford, Bodleian Library, ms Cod. Graev. 29 (ms ar. christ. Uri 103) (n. d.), fols. 1a-65b (以上 *GCAL*, Vol. 2, 474-475); Paris, Bibliothèque nationale, ms arabe 82 (15 世紀), fols. 155a-158b (「伝記」のみ。ms arabe 72 と同一。Troupeau, *Catalogue*, Vol. 1, 66) (未見); Cairo, Fumm el-Khalīj, Kanīsat Mār Mīnā, ms kutub dīnīya 1 (1726 ?), fols. 2a-98a (未見); Cairo, Maktabat ad-Dār al-Baṭriyarkīya, ms tāriḫ 51 (n. d.) (未見); 同, ms tāriḫ 86 (1814); Cairo, Kanīsat al-Qiddīsīn Sirjiyūs wa Wakhūs, ms Hag. 8 (17-18 世紀), fols. 1b-78b(未見) (以上 *Enciclopedia dei santi*).

ヨーロッパ各地の図書館が所蔵しており、エジプトではカイロの教会が多く所蔵している。1358 年に完成し、現存する最古の手稿本であるフランス国立図書館所蔵 ms arabe 72 は、文字に点が施されておらず、解読が非常に難しい。参照できた手稿本の中では、フィレンツェ国立中央図書館所蔵手稿本が最も ms arabe 72 に近い。フランス国立図書館所蔵 ms arabe 282 は ms arabe 72 の語彙の一部を文法的に訂正しているうえ、「奇蹟録」の一部が他の手稿本と異なる。

構成：「伝記」「奇蹟録（全 43-44 話）」からなり、「伝記」は短い礼讃文、バルスーマーの生涯、説教からなる。「伝記」に比べ、「奇蹟録」が圧倒的に長い。

iii) アラム伝

生涯：この聖人の生涯は管見の限り紹介されたことがない。下エジプトの修道院で修行した後、下エジプトを放浪した。その後カイロへ赴き、日中は職人として働きながら、夜間、シャフラーン修道院のバルスーマーのもとへ通った。バルスーマーの死後はシェブラーの教会へ移り、その地に埋葬された。

手稿本：Paris, Bibliothèque nationale, ms arabe 153 (17 世紀), fols. 8b-22a (以上 *GCAL*, Vol. 2, 475); Dayr Anbā Anṭūnī, ms tāriḫ 110 (未見).

構成：「伝記」「奇蹟録（全 9 話）」からなる。生涯に関してはアラムが 20 歳のときに出家したという記述から唐突に始まる。

(3) 聖人伝に関する考察

先行研究や収集した手稿本をもとに、14 世紀アラビア語コプト聖人伝の特徴を分析したところ、以下のことが浮かび上がった。本研究が扱った聖人伝は「伝記」と「奇蹟録」からなり、構成においてゆるやかな統制が見られるものの、完全な定型がある

わけではない。そこに描かれた聖人の生涯も、禁欲生活を送り、神と人との間の執り成しを行ったほかは、身分や活動した地域、政権との関係などにおいて、多様である。例えば身分としては隠者／修道士／司祭／労働者と多岐にわたる。また放浪生活を送った聖人はユハンナー・アッラッバーンとアラムであり、同じ場所に長らく滞在した聖人はユハンナーの師であるハディードとバルスーマーである。

聖人伝の編纂はおそらく弟子の修道士や在家信徒の手によるものであり、編纂の条件として、当時有力であった修道院の出身-バルスーマーらの場合はカイロ郊外のシャフラーン修道院-であることと、総主教との関係の深さが指摘できる。シャフラーン修道院はユハンナー・アッラッバーンが修行し、バルスーマーとアラムが滞在したうえ、バルスーマーの庇護下にあった修道士が後に総主教となっている。

本研究においては、従来知られていた以上の聖人の存在と、その活動の広がりを明らかにした。編纂の条件を考えると、14世紀のエジプトには現在伝わっている以上に、数々のコプト聖人が活躍していたことが示唆される。

同時代の「生きた」聖人について、聖人伝がこれほど多く編纂されたことは、14世紀特有の現象であり、15世紀以降は見られない。なぜ14世紀なのか、ということであるが、やはり当時起きていた迫害との関連が考えられる。各聖人伝は必ず、聖人が逮捕など当局による迫害を経験したり、教会破壊に抗議したりしたことに言及している。これは、コプト教会の正史である『アレクサンドリア総主教座の歴史』が14世紀に起きた迫害について沈黙していることと対照的である。これら聖人伝は、人々が自らの体験を共有、そして理解するために編纂され、聖人の記念日に教会で読み上げることにより、信徒を慰めることを目的としていたのではないかと推察される。

(4) 成果の発表

本研究に関連して2012年1月現在、学会報告を2回行い、研究ノート1本を著した。

- ・辻明日香「14世紀アラビア語コプト聖人伝史料に関する一考察」『オリエント』第54巻第2号（2012年3月刊行予定）
- ・辻明日香「マムルーク朝期エジプト・デルタ地方におけるコプト集落：コプト聖人ユハンナー・アッラッバーンの足跡を中心に」第27回日本中東学会年次大会報告（2011年5月）
- ・辻明日香「14世紀エジプトにおけるコプト聖人の機能と特徴」地中海学会定例研究

会報告（2011年7月）

4. 今後の展望と課題

本報告書では、聖人伝の史料的情報の報告に留まり、これら聖人伝をもとにした14世紀エジプトにおけるムスリム・キリスト教徒関係の考察に踏み込むことができなかつた。これは、予期していたよりも聖人伝史料が多く発見され、その情報の整理や手稿本の読解に時間を要したためである。同時に、これらの発見は西アジアの歴史をイスラーム以外の視点から捉え、いくつもの宗教が共存してきたこの地域の歴史を再構築するための、アラブ・キリスト教史研究の可能性を示唆している。コプト聖人についても、14世紀後半に生きた聖人に関する同様の研究や、同時期エジプトで活躍したムスリムの聖者の活動との比較を行うことで、その活動から西アジア社会の新たなイメージを提示できるものと考えている。これらの課題について、今後研究を進めたい所存である。

最後になるが、本研究は財団法人JFE21世紀財団より2009年度アジア歴史研究助成の交付を受けて遂行された。ここに記して深く御礼申し上げたい。

参考文献

1. Crum, W. E., "Baršaumâ the Naked," *Proceedings of the Society of Biblical Archaeology* 29 (1907), 135-149, 187-206.
2. Graf, G., *Geschichte der christlichen arabischen Literatur* (以下 *GCAL*), Vol. 2, Città del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana, 1947.
3. Mattâ'us as-Suryānī, *Al-Qiddīs Anbā Ḥadīd al-Qiss wa Tilmīdh-hu al-Qiddīs Yuḥannā ar-Rabbān*, Wādī an-Naṭrūn: Dayr as-Suryān, 2005.
4. Swanson, M. N., *The Coptic Papacy in Islamic Egypt (641-1517)*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2010.
5. Troupeau, G., *Catalogue des manuscrits arabes*, 2 vols, Paris: Bibliothèque nationale, 1972-1974.
6. Wadi Abuliff, "Barsauma il Nudo," in J. Nadal Cañellas, *et al.* (eds.), *Enciclopedia dei santi: le Chiese orientali*, 2 vols., Roma: Città Nuova, 1998.